

【論文】

春日遅遅——『枕草子』『三月ばかり、物忌しにとて』の段の贈答歌——

坪 美奈子

一 章段の中核——贈答歌

『枕草子』『三月ばかり、物忌しにとて』の段(二八〇・能因本)は、春、三月頃の「物忌」の折に材を取って綴られている。章段の核心は、退出先の清少納言と後宮の主・定子との間に交わされた一對の贈答である。定子による贈答は、「仰せ言」の形で、近侍の女房・宰相の君からの文として届けられた。

(定子) いかにして過ぎにし方を過ごしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな  
宰相の君の私信として、「今日しも千年の心ちするを、暁にだにとく」と添えてあった。

定子の言葉(歌)を伝える文がもたらされた時、「いとうれしくて見る」と、大変に喜んだ清少納言であったが、この時、どういふわけか返歌に窮し、「啓せむ事はおぼえぬ」(お返事として申し上げるべきことが思いつかない)状況であったという。それでも、何とか、

(清少納言) 雲の上も暮らしかねつる春の日を所がらともながめけるかな

と詠んだ。宰相の君に宛てて「今宵のほども、少将にやなりはべらむずらむ」と添え、丸二日の物忌を終えて、急ぎ、暁に帰参した。私信に「今宵のうちにも少将になってしまいうさう」と述べる部分については、「少将」というのが何(誰)であるか分かっていない。宰相の君の「暁にだにとく」(せめて明け方には急いで…)という言葉に呼応して、今すぐにも馳せ参じたい気持ちを表現したところと解されるが、従来、『枕草子』解釈の中で、数少ない大きな謎の一つ(萩谷朴)などと言われている。

『枕草子』の未解明の部分とえば、文学としての主題や手法の問題にはじまり、各段・各場面の解釈をめぐって決して「数少ない」とは言えないであろうが、ここもよく知られた「謎」の一つではある。

本段の贈答は、『千載集』にも採られ、『枕草子』に記しとどめられた主従の贈答として特に注目されてきたものであるが、不明の点も多い。

一条院御時、皇后宮に清少納言はじめて侍りける比、三月ばかり二・三日まかでて侍りけるに、かの宮よりつかはされて侍りける

いかにしてすぎにしかたをすぐしけんくらしわづらふ昨日けふかな

(雑上・九六六・藤原定子)

## 御返事

雲のうへもくらしかねける春の日をとこがらともながめつるかな

(九六七・清少納言)

詞書に初出仕頃の贈答(「皇后宮に清少納言はじめて侍りける比」とするのは、まず、歌の内容によるところが大きい。北村季吟『枕草子春曙抄』(延宝二)は、この詞書を引いて、次のように解している。

此始て侍けるといふに心を付べし。二三日清少の侍らぬさへさびしきに、

其前は何としてくらせしぞと也

(十一卷)

『清少納言伝記攷』(新生社 一九五八)を著した岸上慎二氏は、『枕草子講座 第一巻』(有精堂 一九七五)の巻頭「清少納言研究への招待」において、特に当該の贈答を取り上げて論じている。この点については、やはり、次のように、和歌の内容を根拠としている。

右の贈答歌は千載集雜歌上に収められているが、少納言の宮仕の初期のことと考えた詞書をつけている。定子の和歌によつてそのような考えが生じる根拠がある。

この時の主従のやり取りは、これでまいではない。章段の末尾には、暁に参上した清少納言に対する、定子の言葉が記されている。

「昨日の返し、『暮らしかねける』こそ。いとにくし。いみじうそしりき」

清少納言の寄越した返歌のまずさをあげつらつて、大変な「憎み」ようであるが、本人もそれを認めて「いとわびしう、まことにさる事も」としめくくる。しかし、清少納言の返歌が、「失敗」作であるとして、その失敗の内容や理由(原因)については、従来、必ずしも明らかになっていない。

本稿では、一話の中核を成す、和歌贈答の解釈をめぐつて問題の多い当該

段を取り上げ、従来読み取られてこなかった、主従の応酬の主題について明らかにしたい。

## 二 章段の本文

前節において掲出した本文箇所、すなわち本段の中核を成す和歌贈答の部分についても、主たる両系統「能因本」と「三卷本」の間には幾つかの異同が存する。まず定子詠・贈歌「いかにして」については、第三句、「過ぎけむ」(能因本)と「過ぎしけむ」(三卷本)の違いがある。清少納言詠・答歌「雲の上も」については、二箇所、第二句と結句における助動詞「つる」と「ける」が入れ替わった形になっている。さらに注解付きテキストのレベルにおいては、清少納言の歌の第四句について、「所がら」(能因本・三卷本)と「所から」(三卷本)等の相違も見られるが、底本の問題ではなく、ここは現代語訳(後掲、第三節)などにも影響が出ていない。

ほかに、三卷本には、清少納言がこの時の返歌に窮したという部分、「啓せむ事はおぼえぬこそ」がない。

以下に、章段の全文を能因本系統「三条西家旧藏本」に拠つて掲げる。三卷本の異同箇所について傍記して示す(適宜、表記を改める)。

① 三月ばかり、物忌しにとて、<sup>かりそめなる所に</sup>かりそめなる人の家に行きたれば、木ども<sup>などの</sup>などはかばかりからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしくはあらで、<sup>ず</sup>葉ひろう<sup>は</sup>見えてにくげなるを、「あらぬものなめり」と言へば、「<sup>ど</sup>かか<sup>る</sup>もあり」など言ふに、

(清少納言) さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてを伏<sup>す</sup>さる宿なな<sup>見ゆれ</sup>とこそ見えしか。

② そのころ、また、同じ物忌しに、さやうの所に出でたるに、二日といふ昼つかた、いとどつれづれまさりて、ただいまもまぬりぬべき心ちするほどにしもあれば、<sup>御言のあれば</sup>いとうれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君いとをかしに書きたまへり。

(定子)「いかにして過ぎにし方を過ごしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな」となむ。わたくしには、「今日しも千年の心ちするを、暁にだにとく」とあり。この君のたまはむだにをかしかるべきを、まして仰せ言のさまには、おろかならぬ心ちすれど、<sup>は</sup>啓せむ事はおぼえぬこそ。

(清少納言)「雲の上も暮らしかねつる春の日を所がらともながめけるかな」わたくしには、「今宵のほども、少将にやなりはべらむずらむ」とて、暁にまゐりたれば、「昨日の返し、『暮らしかねける』こそ。いとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるる、いとわびしう、まことにさる事も。

類纂系統の「前田家本」では、先に注目した箇所のうち、定子詠・贈歌「いかにして」の第三句は、三巻本と同様の「過ぐしけむ」であるが、清少納言詠・答歌「雲の上も」の結句は、能因本と同様の「ながめけるかな」である。また、能因本の第二句「暮らしかねつる」は、「三条西家旧蔵本」のみの形で、「富岡家旧蔵本」ほか版本に至る諸本はみな、「暮らしかねける」である。この時、一首は、次の形で前田家本と同様になる。

雲の上も暮らしかねける春の日を所がらともながめけるかな

能因本による注解付きテキストでは、底本(「三条西家旧蔵本」)の第二句「暮らしかねつる」を諸本の「暮らしかねける」によって校訂し、清少納言の返歌については、前田家本と同様の形で読むことになっている。これによって、歌の本文は、定子による批判の言葉に引用された形「暮らしかねける」と一致することになる。しかし、「三条西家旧蔵本」の場合、清少納言の歌

と定子による引用の形が、「かねつる」(歌)↓「かねける」(引用)と、一致していないのである。興味深いことに、前田家本の場合も、定子による批判の言葉は、歌の本文通りではない。引用された形は「暮らしかねけむ」であり、「かねける」(歌)↓「かねけむ」(引用)と、歌本文と引用の言葉はやはり、一致していないのである。なお、『千載集』の和歌本文(前節に掲出)は、三巻本と同様。

また、「返すべき事柄が思いつかない……」という、三巻本にない部分「啓せむ事はおぼえぬこそ」は、前田家本にもあって、能因本と同様である。

当該「三月ばかり、物忌しにとて」の段を今、新しく読み解くにあたつて、次の三点が課題となるだろう。本文系統の相違を越えて考え、把握すべきことである。

- ・ ①の場面(「物忌」1)と②の場面(「物忌」2)の関係性について、一つの章段としての有機的な繋がり。

- ・ ②の場面の贈答の趣旨とともに、答歌の「失敗」を語る意味。

- ・ 章段末尾、定子による批判の矛先(対象)と本質。

さらに、見てきたように、本文異同の問題もある。特に、「啓せむ事」が思いつかなかったという部分と、定子による清少納言詠の批判・引用のあり方は、贈答歌の意義を読み解く上で重要である。主従の贈答の趣旨を明確に捉えることによって始めて、本段の主題も明らかになると言える。

### 三 従来の解釈

「三月ばかり、物忌しにとて」は、未解明の事実も多いながら、「定子後宮における清少納言の地位を占う文章」(岸上・本稿第一節掲論)として注目され、重要視されてきた一段である。これまで、どのような解釈と評価が与

えられてきたのであろうか。

本節では、贈答歌の解釈を中心に、当該段をめぐる従来の諸説について見ていく。従来の『枕草子』と作者・清少納言観について知る上でも基礎となるところであるので、少し長くなるが、まず、岸上氏による解釈について引用する。

定子のお側に少納言が存在しないことが「暮らしわづらふ」原因につながる」とすると、少納言は定子にとって実に重要な人物であるという評価になる。宮仕に出仕して間もなくのこととて、少しの割引はして考えなくてはならぬだろうが、少納言の宮仕場における重さは十分考えられる。これに対して少納言は迂闊にも「雲の上も暮らしかねける」と表現してしまった。この表現の出すぎた点を厳しく定子方は捉えて非難したのである。「暮らしわづらふ」と「暮らしかねける」とでは淋しく「暮らす」状態に大きな差があるのである。召仕人として主人に対する心のあり方に、有頂天があると感じられる表現になっている点をいましめられたのであろう。春曙抄の注（坏注・後掲）が正当であろう。定子にとって少納言は必要な人物であったが、主人と召仕との関係については厳しい態度を持たれていたことを示すもので、言葉に対して敏感の筈の少納言も失敗を犯していることの述懐である。さてこのところでもう一つ附加しておくべきことは、当時の後宮生活にとって「暮らしわづらふ」「暮らしかねける」という精神状態はもつとも忌むべきものであったということである。情趣尊重時代の後宮のもつとも追求したものは「物のあはれ」であったとすれば、「手もち無沙汰に一日を暮らしかねける」ことは軽蔑されることで、そのようなことのないように、有能な才女が多く後宮に集められていたわけで、枕草子もそれらの中における定子後宮での一人の女房の所産であったわけである。

引用文中、傍線を付したが、和歌の解釈（一重傍線部）と、そこから推し測った定子後宮における清少納言の宮仕えのあり様（二重傍線部）とが示されている。その宮仕えのあり様は、さらに王朝の世、「情趣尊重時代」の美意識（波線部）と関わるものとして捉えられ、その上で、作品『枕草子』の意義について「一人の女房の所産」と見なす、この部分の結論が示されている。なお、『清少納言伝記攷』では、本段の事件年時について「初宮仕を正暦四年冬と解釈する立場上、ここは正暦五年三月と見たい」（四七八頁）としている。日記的章段の中でも、本段は何か特別な事件について扱うものではなく、随想的な一段とも言えるが、『枕草子』研究上、その内容については、改めて考察すべき意味が十分にあると言える。

『春曙抄』の注は、「清少を待かねて后宮のくらしかね給ふと（坏注・清少納言自ら）いへるやうなるを、あまりうけぱりたる事とはふれの給也（十一巻）」というものである。

主従の贈答について、『大系』本（池田亀鑑・岸上慎二校注、一九五八）の解釈は次の通りである。以下、諸注における段数表示も併記する。

定子「いかにして」 いったいどのようなようにして過去の月日を送ったのでしよう、昨日今日はどうかうらしてよいか本当に困っています。

（三〇一段、三二二頁・頭注二）

清少納言「雲の上も」 宮中でもお暮らしにならんか春の日でござい  
ますのに、私はまあ田舎のせいでわびしいのかと思いました。

（三二二頁・頭注六）

定子詠にいう「過去の月日」（本文「過ぎにし方」）については、清少納言の出仕前、のこととして捉えていると思われる。『大系』は、事件年時について次のように述べている。

宮仕の初期であることはその和歌の贈答ぶりから考えられ、又、「九九」

に、中宮が清少納言の和歌から遠ざかることを許された記事（坏注・いわゆる「詠歌御免」の一件）があるが、それより以前であろう。正暦五年の三月ごろと思われる。（三六〇頁・補注二四八）

その後、定子詠については、清少納言の不在が直接、現代語訳に反映されてくることになる。次は、『全集』本（松尾聡・永井和子校注・訳、一九七四）の現代語訳である。

**定子「いかにして」** いったいどういふうにして過去の月日を過ごして来たのであろう。そなたが退出してから、日を暮らすのに苦労するきのうきようであるよ

**清少納言「雲の上も」** 中宮さまが、雲の上でもお暮らしかねあそばしたのだった春の日を、私は、私の今居りますさびしい場所のせいで暮らしかねるのだと思って物思いにふけていたこととございましたよ（二八〇段）

三巻本を底本とする『新編全集』本（松尾聡・永井和子校注・訳、一九九七）の現代語訳（二八二段）も、この点、表記以外、変わるところがない。清少納言の返歌のほうだけ、第二句「暮らしかねける」の訳が、『全集』「お暮らしかねあそばしたのだった（春の日を、…）」から、『新編全集』「お暮らしかねあそばした（春の日を、…）」に変わっている。本文の異同は、むしろ結句の「けるかな」（能因本）と「つるかな」（三巻本）に見られたはずであるが、ここは「（〜でございました）よ」の有無の違いしかない（三巻本底本『新編全集』の現代語訳に末尾の「よ」なし）。旧『全集』本が、「三条西家旧蔵本」による第二句「暮らしかねつる」を、諸本によって「暮らしかねける」に訂していることは、既に見た。定子の批判の言葉における引用と合致していることになる。

田中重太郎氏『枕冊子全注釈 五』（能因本底本、角川書店 一九九五）

では、『全集』の「退出」云々にあたる部分の解釈がさらに詳しくなる。

**定子「いかにして」** 昨日今日のたった二日間そばにいないだけでも、時間が長く退屈でしかたがないが、そなたが宮仕えをするまで、どうして毎日を送って来たのであろうか。

**清少納言「雲の上も」** 中宮さまのいらせられる雲の上の貴いところでも日の暮れるのを待ち遠しく思い、退屈あそばしたそうでございますが、この春の日長をわたくしは、自分がいまいる環境がひとりなのでこんなに日が長く、暮れにくいのだと思って嘆いていたこととございます。（二八〇段、一九四頁・語釈）

清少納言の不在に触れて無聊の理由とすることは、金子元臣『枕草子評釈』（明治書院 一九二二）にさかのぼって同様である。定子詠の第二句「過ぎにし方を」について、清少納言の「宮仕え前」と解すのである。

**定子「いかにして」** どうして従来は過して来た事だらう、お前が退出してから、退屈で暮しかねたこの日頃であるよ

**清少納言「雲の上も」** 禁中で中宮様が、お退屈で暮しかねたと仰しやる程の長い春の日を、自分はこの所柄かうも退屈なのかと思つて詠めたことよ（二五八段）

「清少の居らぬ故物寂しくて、昨日今日の僅か一日二日すら、かく暮しかぬるを、如何にして清少の宮仕せぬその以前は、過し来りしことならん」と説明している（二〇三頁・釈）。

萩谷氏の解釈は、次の通り。やはり、定子詠については、清少納言の不在を一首の核心として捉えている。

**定子「いかにして」** どのようにしてそなたが出仕する以前の昔は一日一日を過ごしていたのかしら、そなたがいなければ一日一日が退屈で過ごしかねる今日この頃ですよ

〔『枕草子解環 五』同朋舎 一九八三、二八二段・口訳〕  
さらに、「そなたが出仕する以前の昔は（一日一日を）」というのに加えて、「そなたがいなければ（一日一日が）」と訳出するのが特徴的である。清少納言の返歌のほうは、

清少納言「雲の上も」 宮中でも過ぎしかねていらつしやるそうな退屈  
な春の日永を、私は場所が場所だからかと思つてぼんやり過ごして  
たことです

と訳出している。「暮しわづらふ」「暮しかねける」という主従の歌ともに、金子『評釈』・田中『全注釈』・萩谷『解環』はみな、「退屈」な春の日をめぐる詠歌として捉えている。『大系』本や新旧『全集』本では、その点「困っている」「わびしい」また「苦勞する」などと訳出している。

増田繁夫氏『枕草子』（和泉書院 一九八七）も、定子詠については、清少納言の不在、を中心にして訳出する。頭注に掲げた『千載集』の詞書を主な根拠とするものと見える。

定子「いかにして」 あなたと会わない以前は、どうしてつれづれを慰  
めていたのでしょうか、の意。 (二八六段、一二四頁・頭注一二)

清少納言「雲の上も」 宮中でも、くらしかねけるとおつしやる春の日  
ですから、ましてこんな所では当然と。 (二二五頁・頭注一)

石田穰二氏『新版枕草子』（角川書店 一九八〇）も、補注に『千載集』の詞書を掲げ、初出仕の時期について「作者の出仕を正暦四年の冬とすれば、その翌年正暦五年の春であろう」と記す（下巻、二四四頁・補注二七四）。定子詠の趣旨について「退屈」とする解釈である。

定子「いかにして」 あなたの出仕前はどうして過ごしていたのでしょ  
う、退屈でしかたのない昨日今日です。

清少納言「雲の上も」 雲の上でも（中宮も）暮しかねていた春の日の

所在なさをさびしい場所柄のせいとばかり思っていました。

(二八六段、一五四頁・脚注一及び五)  
以上、まず定子の贈歌について、諸注の解釈はみな、「暮しわづらふ昨日今日」に対する「過ぎにし方」について、清少納言と会う前、のこととして捉えるものであった。また、定子詠・清少納言詠それぞれの「暮らしわづらふ」「暮しかねける」という状態について、「退屈」と訳出するものが目立った。しかし、これらは、果たして歌の本文から読み取り得ることであつたのだろうか。

——いかにして過ぎにし方を過ごしけむ

というのは、あくまでも「暮しわづらふ昨日今日」以前のことである。「暮しわづらふ昨日今日」、清少納言が不在であることはその通りであるが、「過ぎにし方」について、清少納言の出仕前、と解す必然性はないのではないだろうか。そのように解することによって、肝心の歌の趣旨が読み違えられてしまっているのではないか。従来、言及のない所である。

主従の贈答の趣旨は、従来考えられていることのほかにあるのだ。これまでの解釈においては、言わば〈盲点〉となつてることがらである。

#### 四 贈答の趣旨——「暮らしわづらふ」をめぐる

これまで読み取られてこなかった贈答の趣旨とは、実は、本稿のタイトルとして掲げた「春日遅遅」の思いである。「暮らしわづらふ」精神状態について、「もつとも忌むべきものであった」（前掲、第二節・岸上）と捉えてしまつては解し得ない《思い》である。定子の贈歌は、すなわち、

「春の日というものが、こんなにも切なく過ぎし難いものであったとは

——」

という告白なのである。清少納言の不在について直接言ったものではない。「春日遅遅」の思いを述べる歌として清少納言のもとに届けられてはじめて、歌に寵められた、清少納言を求める定子の心が伝えられることになる。

「私はいったいどのようにして過ぎた日々を暮らしてきたのだろうか」というのは、今の時の生き難さ、苦しさをもって述べたものである。「過ぎにし方」というのは、暮らし難いこの春の日を知らずに過ぎた日々のことであって、しかも、その《思い》は突然にやってきた。

清少納言の不在によって、気づくこととなった思いであるが、その思いは、春の日の《特別な思い》なのである。歌の本文には詠まれていない、その宮仕え期に及んで解することにより、従来は、肝心の歌の趣旨について捉え損ねてしまっていたのではないだろうか。歌の現代語訳としても、解説としてもこの点に触れた注釈はこれまでにない。定子詠「いかにして過ぎにし方を過ぎしけむ暮しわづらふ昨日今日かな」の、「春日遅遅」の切実な思いをもたらすことになったのは、清少納言の存在とその不在であるが、表現として、一首の核心は思いそのものにある。もちろん、清少納言が居なくて退屈だ——だから、その存在が重要だということではない。

従来の解釈では、「春日遅遅」の思いを受けたものとして成り立つ清少納言の「雲の上も暮らしかねつる春の日を所がらともながめけるかな」という返歌の趣旨も明らかにはならない。贈歌の表現の単なる「反復」ではない。これは、ただ「春の日長」ということや「所在なさ」という程度のものである。どうしようもなく、じりじりと胸に迫る生き難さである。

それは例えば、『古今集』恋三の冒頭に置かれた、在原業平の、  
やよひのついたちより、しのびに、人にももらひてのちに、雨の  
そほふりけるに、よみて、つかはしける

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ

春日遅遅——『枕草子』『三月ばかり、物忌しにとて』の段の贈答歌——（坏）

（恋三・六一六）  
という歌に詠まれた思いである。これは『伊勢物語』二段にもある。

和歌の例としては、「春日」を詠むものを見るとなお分かり易い。「春の日」を詠む名歌と言え、まず『古今集』春部の友則詠、

桜の花のちるをよめる

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

（春・八四・紀友則）

であるが、恋の歌としては、業平の「おきもせず」の歌と同じ恋三に、春の日長を詠む歌が見える。

あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ

（恋三・六二四・源宗子）

『後撰集』春下には次の歌が入る。

女につかはしける

春の日のながき思ひはわすれじを人の心に秋やたつらむ

（春下・八六・よみ人知らず）

同趣の歌は、すでに『万葉集』に見える。次の例などは、定子が清少納言に詠み送った歌とも、表現の面で似通うところがある。

（霞に寄す）

恋ひつつも今日は暮しつ霞立つ明日の春日をいかに暮さむ

（十・一九一四）

「長き春日」と詠むのは、『万葉集』中、巻一の次の歌が初出である。

讃岐国安益郡に幸しし時、軍王の山を見て作る歌

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず 村肝の 心を痛み

鴛子鳥 うらなけ居れば 玉櫛 懸けのよろしく 遠つ神 わご大君

の 行幸の 山越す風の 独り居る わが衣手に 朝夕に 還らひぬれ

ば 大夫と 思へるわれも 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る たづきを  
知らに 網の浦の 海処女らが 焼く塩の 思ひそ焼くる わが下ご  
ろ (一・五)

春の日に、胸に迫って払い得ぬ丈夫の望郷の情を詠む。反歌には妻を恋う思  
いが述べられている。

## 反歌

山越しの風を時じみ寝る夜おちず家なる妹を懸けて偲ひつ (一・六)  
次は、家持の代表作の一つであるが、ここに歌われているのは、まさしく  
「春日遅遅」の、孤独な春愁の情そのものと言えよう。二月の詠である。

## 二十五日、作る歌一首

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば

(十九・四二九二)

左注に、「鶺鴒」(高麗鶺)啼く「春日遅遅」の情調——春の日にひとり悲し  
む「悽惻の意」を述べた歌であると言ふ。

春日遅遅にして、鶺鴒正に啼く。悽惻の意、歌にあらずは撥ひ難し。よ  
りて此の歌を作り、式ちて締緒を展ぶ。

春日遅々鶺鴒正啼。悽惻之意非レ歌難レ撥耳。仍作「此歌」、式展「締  
緒」。

『詩経』小雅「出車」に「春日遅遅 卉木萋萋 倉庚(坏注・鳥名)喈喈  
采繁祁祁」、豳風「七月」に「春日遅遅 采繁祁祁 女心傷悲 殆及公子同歸」  
と見える。

集中、ほかにも、卷十「春雑歌」に次の歌がある。

## (月を詠む)

朝霞春日の暮れば木の間よりうつろふ月を何時とか待たむ (二八七六)  
同じく卷十「春相聞」には、先に挙げた「恋ひつつも」(一九一四)の歌の

ほかに、「春日」、特に「長き春日」の形で詠み込むものが多く見られる。

## (霞に寄す)

さにつらふ妹をおもふと霞立つ春日も暗に恋ひ渡るかも (一九一一)

## (草に寄す)

おぼほしく君を相見て菅の根の長き春日を恋ひ渡るかも (一九一二)

## (別れを悲しむ)

朝戸出の君が姿をよく見ずて長き春日を恋ひや暮さむ (一九二五)

相思はぬ妹をやもとな菅の根の長き春日を思ひ暮さむ (一九三四)

相思はずあるらむ呪ゆ糸玉の緒の長き春日を思ひ暮さく (一九三六)

「春雨」の景によつて思いを述べる歌もある。

春雨の止まず降る降るわが恋ふる人の目すらを相見しめなく(一九三二)

吾妹子に恋ひつつ居れば春雨のそれを知る如止まず降りつつ(一九三三)

「長き春日」は、思いが叶わずただ独り暮す、やるせなく切ない恋の思い  
と密接に関わつて詠まれるものであった。

あらたまの 年は来去きて 玉梓の 使の来ねば 霞立つ 長き春日を

天地に 思ひ足らはし たらちねの 母が養ふ蚕の 繭籠り 息衝き  
わたり わが恋ふる 心のうちを 人に言ふ ものにしあらねば 松が  
根の 待つこと遠く 天伝ふ 日の闇れぬれば 白木綿の わが衣手も  
通ひて濡れぬ (十三・三三五八)

「春」という季節は、「うら悲しき」「もの悲しき」ものとして詠まれる。

## (中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子との贈答の歌)

春の日のうらがなしきにおくれ居て君に恋ひつつ現しけめやも

(十五・三七五二・娘子)

春まけて物悲しきにさ夜更けて羽振き鳴く鴨誰が田にか住む

(十九・四一四一・家持)

……八峰には 霞たなびき 谿辺には 椿花咲き うら悲し 春の過ぐ  
れば 霍公鳥<sup>ほととぎす</sup> いや頻き鳴きぬ 独りのみ 聞けばさぶしも…

(十九・四一七七・家持)

二十三日、興に依りて作る歌二首

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも

(十九・四二九〇・家持)

右の歌の「二十三日」は二月。「わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも」(十九・四二九二)も同日の詠。「春日遅遅」の思いを述べた前掲「二十五日」の「うらうらに」(十九・四二九二)の歌とともに「春愁三首」と称され、家持の叙情歌として名高い。

一方、平安期の和歌では、「秋」こそ「悲しき」季節として詠まれるようになる。「おく山に」の歌は、「百人一首」に猿丸大夫の歌として入る。

これさだのみこの家の歌合によめる

月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど

(『古今集』秋上・一九三・大江千里)

おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲しき

(『古今集』秋上・二二五・よみ人知らず)

王朝の表現として、「春日遅遅」の憂愁の情は、前掲『後撰集』春下の歌、「春の日の長き思ひ」(八六)の、この表現に集約されると言えるだろう。

秋の夜長をより一層長く、春の日長をいよいよ切実に長く思わせるものは、恋しい人の不在であった。また次は、『枕草子』中の表現とも関わりの深い『白氏文集』「長相思」(十二・五八九)詩冒頭の部分である。

九月西風興 月冷霜華凝 思君秋夜長 一夜魂九升

二月東風来 草析花心開 思君春日遲 一日腸九廻

(九月西風興り、月冷やかにして霜華凝る。君を思うて秋夜長し、

一夜魂九升す／二月東風来り、草析<sup>ひら</sup>けて花心開く、君を思うて春日遅し、一日腸<sup>はらわた</sup>九廻す)

正暦五年(九九四)二月二十日に行われた「積善寺供養」(二五六段)の前、二条の宮から一旦里に下がった清少納言は、定子の「花の頃」の問いかけに對し、あえて秋の表現に拠りつつ、「よにこの<sup>こ</sup>度なむのぼる心ちし侍る」(三条西家旧蔵本)と答えた。<sup>(4)</sup>次は、同じく白樂天の「驪宮高」(四・一四五)詩中の句で、『和漢朗詠集』(上・夏・蟬・一九二)に採られた部分である。「悽惻」の情とは異なるが、「春日遅遅」の景を詠む。同詩による表現は、作品中、後宮のあり様と関わって特に重要な場面に見られる。

遅遅兮春日 玉盤暖兮温泉溢 嫋嫋兮秋風 山蟬鳴兮宮樹紅

(遅遅たる春日には、玉盤暖かにして温泉溢れ、嫋嫋たる秋風には、

山蟬鳴いて宮樹紅なり)

「春日遅遅」の情とともにあるのは、男女の恋愛に限らず、主従、朋輩の関係も含め、人を恋うる気持ちである。<sup>(5)</sup>次のようにも詠まれている。

冬の日を春よりなくなす物はこひつつくらす心なりけり

(『千載集』恋三・七九六・藤原忠通)

暮れの春における定子の詠、「いかにして過ぎにし方を過ごしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな」も、まず、「暮らしわづらふ」春日遅遅の情を核心としてこそ、清少納言の存在を求める歌として成立しているのである。言葉として花鳥も月も恋もなく、思いそのものを謳った名歌と言えよう。

さて、帰参後の定子たちによる、批判<sup>1</sup>の実情は、本段をめぐる難問の一つに挙げられる。

(定子)「昨日の返し、『暮らしかねける』こそ。いとにくし。いみじうそしりき」

『全集』本の注(四三〇頁・頭注一)に次のように述べるのは、『春曙抄』

や金子『評釈』以来の解釈にのつとつたものである。

わかりにくいのが、中宮の歌を、真正面からうけとめて、「中宮が少納言を待ちかねて暮らしかねたのだった」(暮らしかねける。「ける」は、今はじめて気がついたの意をあらわす)とよんだのが、少納言の自信過剰で、ひどすぎるとたわまれてしまいましたものともておくが、中宮が少納言の退出でさびしがって暮らしかねたのだったことを今はじめて気がついたとは、察しがなさすぎるの意とみる説もある。

しかし、これも、定子の贈歌の趣旨について明確に捉えて解するとき、新たな読みが可能となるところである。すなわち、今、この時の暮し難さ苦しさを述べる歌に対し、清少納言の返歌「雲の上も暮らしかねる春の日を所がらともながめけるかな」は、確かに「暮らしかねつる」「ながめける」などと、全く「過去」のできごととして表現した形になってしまっているのだ。定子が、今まさに「春日遅遅」たる、わが切情について詠み送ったところ、(効果観面)そのとたんにすっかり心癒され救われてしまった清少納言からは、実に間延びした答えが返ってくるようになった。

能因本(三条西家旧蔵本)の本文によれば、清少納言の歌の言葉「暮らしかねつる」が、定子の引用では「暮らしかねける」に<sup>レ</sup>変じられた形になって、そこに「こそ」も付き、何が気に入らなかったのかは、一層明らかだ。暢気な表現になった相手のミス、温度差を強調したものの言いである。贈歌によって訴えた「昨日今日」の生き難さは、清少納言からの返事を待つ定子にとって、決して「過去」のできごとではないのだ。だがこれは、定子の「切実なご心中を十分に察」(萩谷『解環(五)』二三八頁・問題点)し得なかったための失敗ではないのである。

従って、「いみじうそしりき」「いとにくし」と言いながら、この結末をもつて主従の応酬の成功は証し立てられる仕組みである。「春日遅遅」の憂いを

晴らす主の思いを真っ直ぐに受け止めた清少納言であった。この時の主従の応酬は、言葉を越えて通じ、交わされたものであったと言えるかもしれないが、実際、それ以上の言葉は浮かんてこなかったのである。「いとわびしう、まことにさる事も」と、自身、省みる通りである。なお、三巻本の和歌引用の形は、〈典拠〉に忠実なこの系統の特徴ともみられよう。

## 五 清少納言の「秀句」

『枕草子』には、清少納言が、様々な人と交わした言葉の数々が記しとどめられている。「日記的章段」各場面の中心は「会話」——「対話」であり、その機微をいかに読み解くかということが、清少納言の「秀句」(ウィットに富んだ思いがけない言葉)の意味を捉えるための鍵となる。

『枕草子』に記された清少納言の対話の相手は実に多様である。まず、主家中閑白家の人々。「秀句」巧者の閑白道隆や、その子息伊周・隆家兄弟との応酬。中宮定子とのやり取りは、この作品中、一層重い意味を持つものとなる。殿上の名立たる貴公子たちとの応酬は、「才気煥発で勝気」な清少納言像のもとともなった。かつての夫・橘則光とのやり取りも記されている。そして、定子後宮に集い、ともに過ごした同僚女房たち。怪しげな芸を見せる闖入者——女法師や、また、表で遊び回る子らと交わした言葉などもみな、『枕草子』中に生き生きと写し取られている。

場面の展開に沿う、新しい読み解きが必要となる。和歌による応酬や漢籍摂取の手法などを含め、清少納言の発話のスタイル、「秀句」の特徴について見出されてくるのは、従来の清少納言像とは随分と異なる個性だ。「当時の男たちにとってはどうということもない作者の漢籍の知識」をひけらかし、「中宮の女房ということ殿上人たちからもてはやされ、対等にやり取りし

得たことで、上流貴族の一員になり得たかのような錯覚をもった<sup>(6)</sup>などという見方は、例の紫式部の口吻「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人」(『紫式部日記』)の延長線上にあるものである。

誰もが想像すらしなかった思いがけない展開に、まず驚かされるのであるが、相手の心に即応し、その言葉の可能性を最大限に生かした清少納言の応答が、皆の心をつにする。「ズレ」などという言葉では片付けられない応酬の核心を読み取っていかねばならない。

本稿で取り上げた「三月ばかり、物忌しにとて」の話は、清少納言による応答の「失敗」をもって終わるが、「失敗」こそ、この時の応酬の「成立」と真とを証し立てるものであったのだ。従来は、章段の中核に置かれた主従の応酬(和歌贈答)をめぐり、その点の読みが十分ではなかった。

本段「三月ばかり、物忌しにとて」の贈答歌の解釈をめぐるでは、従来、定子の贈歌「いかにして過ぎにし方を過ごしけむ暮らしわづらふ昨日今日かな」について、「春日遅遅」の情が読み取られてこなかった。「暮らしわづらふ」という表現の必然について、ただ、清少納言の不在のみをもつて解し、「あなたと会わない以前は、どうしてつれづれを慰めていたのでしょうか」(第三節掲・増田)、「あなたの出仕前はこうして過ごしていたのでしょうか、退屈でしかたのない昨日今日です」(同・石田)などと、一瞬一瞬を「暮らしわづらふ」人間の心情の深さ切実さに思い及んでいなかった。

前節にみた「春の日」「春の物」を詠み込む「春日遅遅」の歌の類型に照らして解するとき、従来の現代語訳のままでは、あたかも、定子の生涯の(春)すべてを「つれづれなるもの」——無聊であるのが当たり前として捉えるようなことになってしまつて、おかしいことになる。事件年時に関する、従来の、宮仕え初期(中関白家盛時)という推定とも矛盾することになる。

本段に描かれた主従の心の交流そのものは、必ずしも、年時が限定されな

ければならない(理解できない)ものではないだろう。自明の政治的背景を根拠としてこの作品を読むこれまでの手法は、万全なものではない。

さて、見過ごされてきた《思い》は、添えられた宰相の君の私信「今日しも千年の心ちするを、曉にだにとく」にも重ねて述べられていたことがらである。定子からの文がもたらされた時の、清少納言の「いとうれしくて見る」という感動も、これまで十分に理解されていたであろうか。それは、「春の日」を詠み込む清少納言の返歌「雲の上も暮らしかねつる春の日を所がらとながめけるかな」に明らかに示されていたのである。このみ「春の日長」と訳しても、贈答の主題を解するには至らないのである。「そこに中宮の仰言は優曇華の花だ」(金子『評釈』・評)ということには違いないが、「春の日長」の表現的背景こそ、さらに丁寧を探られるべきことであつた。従来、本段の和歌についても、内容・表現ともにむしろ、「新奇」かつ「特異」なものとして捉えられがちである。

そして、定子からの文を得た瞬間、清少納言の「春日遅遅」たる憂いは跡形もなく吹き消えてしまったのであり、その結果、送られて来た文と心を一にする意味では、もはや「啓せむ事はおぼえぬ」となるのである。

前半部(「物忌」1)の「さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてを伏さる宿かな」のように、誹諧的な機知による歌であれば口をついて出てくるものを、かくも強い感動(喜び)は、歌の修辞にはるかに余ることがある。例えば、「長徳の変」時、「故殿などおはしまさで、世の中に事出で来」(一四六)の段における「古歌の忘却」も、「山吹の花びら」に託された、その時の主従の対話が見事に成功したことを証し立てるものであつた。<sup>(7)</sup>物忌先の家に生う「にくげなる」柳の葉にまず目がゆくのも、対極にある「なまめかし」き「柳眉」の世界を思うがゆえと言えよう。前半部分は、後半の高潮部を控えた、前奏曲的なスケッチとして構成されている。

今、文を得た清少納言の心を占めるのは、宰相の君に宛てた私信にある通り、「今宵のほども、少将にやなりはべらむずらむ」という思いであった。心は、早くも定子のもとに飛び立ち、すでに寄り添っていたのである。それこそ、二条の宮の定子に捧げたのと同じ（本稿第四節）、「魂昇る」思いであった。<sup>(8)</sup>主従の心魂の交響詩とも言うべき一段である。

## 注

※ 勅撰集の用例は『新編国歌大観』、私家集は『私家集大成』（「新編私家集大成CD・ROM版」）により、表記を改めるなどした。『万葉集』歌の所在は旧番号、訓読については主として『大系』によった。

(1) 萩谷朴『清少納言全歌集 解釈と評論』（笠間書院 一九八六）、一八五頁・評

(2) 類聚「は」型・「もの」型、日記、随想と、内部ジャンルによつて冊を分ける前田家本で、本段は日記的章段を集めた一冊中に収められている。日記的章段群を欠く堺本に本段はない。

(3) 『伊勢物語』の物語設定をそのまま一首の解釈の拠り所とする従来の解釈には、なお疑義が存しよう。この点については、拙稿『伊勢物語』の手法―「夢」と「つれづれのながめ」をめぐる（二段「西の京」と二〇七段「身を知る雨」、および六十九段「狩の使」）―（『和洋国文研究』45 二〇一〇・三）。

(4) 『枕草子』の漢籍摂取の表現については、拙著『新しい枕草子論―主題・手法そして本文―』（新典社 二〇〇四）、Ⅲ篇 枕草子の本文―典拠引用における能因本と三巻本の表現差―

(5) 中西進氏に、家持歌の「独りしおもへば」（十九・四二九二）について、特に橘諸兄を対象とした表現とみる説がある（中西『万葉と

海波』角川書店 一九九〇、等）。

(6) 増田繁夫「枕草子の日記的章段」（『枕草子講座 一』（有精堂 一九七五 所収）

(7) 前掲注（4）拙著、I 篇 第一章 「長徳の変」 関連章段の解釈

「なほ世にめでたきもの 臨時の祭のおまへばかりの事」（一四五）の段に、「ゆゆしうせちに物思ひ入れ」た結果、ついに（願い叶って）その所に居つく幽霊となった「少将」（能因本「良少将」。三巻本、前田家本ではそれぞれ「頭中将」、「在五中将」）の噂が見える。従来、思い叶わず絶命する「深草少将」の話柄などが引き合いにされているが、作品の中で解すとすれば、清少納言の私信の言と関わるのは、ここ、一四五段の「少将」であろう。

坪 美奈子（和洋女子大学 言語・文学系 准教授）

（平成二十一年九月十九日受付 平成二十一年十月十四日受理）